



# 針葉樹會報

通卷第六十二號

## 國師迷路行（一）

孫

十月十七日琴川廻行國師大弛の小屋に行かんとして、位置不明の密林中にビバークす。震災の避難民を乗せたやうに混みあつた汽車から、ほうくの態で降りた一行は、大菩薩行の連中が津波引くやうに引上げてしまつた鹽山驛の待合室で次の列車で來さうなペンちゃんを待つたが、遂に姿を見せないでハイヤーで窪平まで行つた。こゝで早くも今日の迷路行の第一歩を踏み出してしまつた。といふのは、夜が明けきらなかつたせいもあるが、琴川に沿ふて溯るその道を、いつ違えたのか、いつの間にか鼓川に沿ふ道に迷ひこんでしまひ、桑畑の中を右往左往したあげく漸く本道に出て來た頃、夜はあけ初めた。暫く北行したが、却々地圖にある軌道と一緒にならぬのに業を煮した望月が、民家で道を尋ねて居たがニコくしながら戻つてきた。

「五十錢位出すとトロツコに乗せてくれるさうですよ、奥千丈の下まで」

そりやすばらしい收獲だといふので一行は忽ち線路に立塞がつて、間もなくやつてくるといふトロツコを待伏せしてゐると、ものゝ十分も経つと馬の引く空のトロツコは現はれたが、五十錢所か、終點（御室）までなら一圓五十錢、金峰泉までが一圓の相場だと即答するのみか、下手に値切つてゐると

「ヂヤ又にしやう」

てな御挨拶で俊寛僧都になりさうなので、田舎者とナメてかゝつてあべこべに足下をみられ、イサ、カあはて氣味になつた一行は一圓二十錢で奥千丈への登路附近まで行くことになり、二臺のトロツコへ現役とO・Bと夫々分乗した。これで今日は三時頃には大弛の小屋へ行けると頗る安氣になつた一行は、此無蓋の展望車で大に得意になつて居たが、いくらも行かぬうちに明方からおかしかつた空からパラ／＼と時雨がやつて來た。雨具に身をかためてトロツコの上に突伏してゐる

と、昨夜の御通夜のせいで何時の間にかトロ／＼と睡氣がさしてくる。登るにつれて琴川の紅葉はすばらしく美しさを増してきてた。木材と炭を運ぶ此縣營の軌道は修理もよく届いて實に堂々たるものであるし、こうした臨時の御客の乗車賃はどうかやら馬方の収入になるらしいので、七圓二十錢の酒代に張り切つた馬子は、上り勾配で馬が立止るとピシリと鞭を鳴らす、登ること約二時間金峰泉を左に見て愈々楊平に出た。此邊の針葉樹に混つた紅葉、此間を去來する白雲、大觀の繪を思はず絶景である。登り登つて地圖の奥千丈の澤に入り込んである軌道（現在では既に伐採を終つてしまつたので廢道になつてゐる）を左に見つゝ琴川を渡り、劍の峯の山腹の沿ふて暫く進んでから小さな山角を一つ廻り稍平になつた處で一行はトロツコを降りた。（午前十一時）（此地點が地圖上でどうもハツキリしない。それが抑々此迷路行の第一歩であつたのだ）軽い晝食をすまして愈々スタートについたが、霧で全然見透がつかない上に現在居る地點が明でないので、いゝ加減の宛推量で進んで行つた。（秩父の大家が行くといふので安心して此行に加はつた私こそいゝ面の皮である）小さな峠を一つ登りきつたので、もう國境尾根の懷に入りこんだのかと思つてゐると突然徑はY字形に別れて右をとるか左を行くのか第一回の討論が始まつた。が右をとることにして約三丁程行くと、白ペンキ塗の道標があつて（左金峯山右山道、休泊小屋あり五丁）と書いてある。（此五丁が恐るべきインチキだつた）此金峯山が又皆を迷はした。（御室を経て金峯へ行くに相違ない、それは意味をなさないから右へ行かう）と一決して右をとつて進むうち雨は相當にひどく

なつてきたのみか、徑はガケがあつたり、熊笹を游いだり、頗る憂鬱になつたあげくの果に、丈なす熊笹の中に消え失せてしまつた。一行は右往左往するがどうしても徑がない。すると下の方で徑を探して居た望月が

「小屋がありますよ」

と呼ぶので降つてみると成程、丈餘の枯蓬を透して小高い斜面に小屋があつた。（さつき道の標から十丁は充分にある）雨愈々激しい。兎に角避難することにして一行は小屋に這入つた。建て、四五年位のものらしく三間に五間位あつて、中央に爐が切つてあり雨は少し漏るが泊つて泊れぬ事はない。取敢えず火を起しにかゝる。第二回目の晝食をとりながら此場所をいろ／＼と評定するがどうもよく判らない。が大弛まで三時間は優にかゝるらしい。突進すべきかこゝに停滯すべきか容易にまとまらぬうち、時は刻々に移つて早二時になつてしまつた。もう愚圖々々しては居られぬ。進める處まで行つてそこから引返すことにして雨を衝いて出た。漸く小屋の裏手に徑を發見して勇躍進むうち、伐採のために徑は隠され、崩されて又五里霧の中に彷徨ひ始めた。此邊は秩父特有の榊の大樹の密林で、眺望は全然無く澤は伐採や鐵砲ですつかり荒れてどこが徑やら手の下しやうがない。幸ひ雨は小降りになつてきた。漸く徑を見出して小さな澤を渡る。

「こゝが櫻平に相違ない」

と近ちゃん得意になつてゐるが私はどうもおかしいと思つた。澤を渡つて小さな丘を一つまわると又左手に澤が現れた。

「愈々國境尾根が近いぞ、之が本谷だからこれを登りつめると國

境だ」といふ聲にはげまされて（實は小屋出發後あまりに時間が早いので、果してさうかどうか疑問であつた）登つて行つた。此頃から空は晴れ渡つて西には青空が見え、陽がさし始めた。さて登りつめた處は國境尾根としてはあまりに貧弱なばかりでなく、明瞭に認められるべき筈の縦走路がどうしても見當らぬ。第一にクマさんの顔に當惑の色が浮んだ。がすぐそこらだらうといふので軽く腹拵をして、さて尾根筋の密林中を東へ東へと進めば進む程、縦走路は愚か踏跡さへも途切れ／＼で、其上困つた事には次第に夕暗が迫つて来て足許が怪しくなり始めた。盲進、又盲進、岐路を右にとつて行くと、小さな峠様の處に出たので樹間を透して遠望すると一行は悲鳴に近い嘆聲をあげたのだつた。前面に立はだかる黒木に蔽はれた幾つかの尾根はこゝから相當の距離があるのみか、どうも國境尾根らしくない。そればかりでなく北へ北へと國境尾根目がけて進んだ筈の一行は、どう徑を取り違えたか南に向つて進んでゐる。さあしまつたと、急いでさつきの岐路まで走るやうにとつて歸し、今度は左をとつて進むうち、陽はトツプリと暮れ、徑は全く無くなり、遂に猛烈な藪を潜つて最期の苦しい登高を續けて辿りついた處は、尾根には相違ないが、依然縦走路は無いのみか、千古斧鏃を知らぬ密林の夥だしい倒木に取りかこまれた小さな平地であつた。軽い溜息が一行の口から洩れた。

「もういけねえ、今夜はこゝにビバークだよ」  
クマさんがさう云ひ切ると、もう度胸を据えた一行の胸には急におかしさが込み上げてきた。

「秩父の大家が揃つて居てどうも大したもんだねえ」  
「さう云はれると面目ないが、今日の徑は全く判らないよ、一體こゝは何處だい、俺あ知らねえよ」  
近ちゃんはさう云つて嬉しさうに笑つた。

「火をヂャン／＼焚こうよ」

臆て天に沖するやうな旺な焚火が始まつた。

「水も無し、パンでビバークか」

柿原の配つてくれた廿世紀は實にうまかつた。午後八時、一行七名は自分が何處に居るのかも知らぬ秩父の密林中でシュラーフザツクに潜りこんだ。

### 久住山 堀岡 清

僕が久住から歸つて来て四五日経つと、手塚さんがやつて来て久住へ行くんだと云ふ。そんならもう少し早く知らせて呉れれば一緒にも行けたものを全く残念だつた。何れ手塚さんから久住に就ての言葉が會報に現はれる事ではせうから、此はその前座を勤める譯。

十月十七日 門司——大分——竹田——久住

十八日 久住(前七、〇〇)——本山瀧——頂上——法華院

(後四、〇〇)

十九日 大船山往復

二十日 法華院(前七、三〇)——<sup>すがかり</sup>諏峨守越——三俣山往復——

製煉所——十三曲(九醉溪)(後二、三〇)——中村

九州の山は殆んど火山だが久住もその例に漏れない。手塚さん

から案外つまらなかつたと言ふ便を戴いたが、それは期待が大き過ぎたので、九州邊の山へ多くを望むのは望む方が無理だ。僕はむしろ案外良かったと思つてゐる。

久住山群の南側を久住高原と呼んでゐる。高原としてはむしろ久住山群の北側の所謂飯田高原の方が廣々としてゐて良い様だと思つた。尤も南側を歩いた日は天氣が悪かつた故かも知れない。だが豊後竹田驛から久住迄の道の間に見た段丘は北側には見られないもので美しかつた。丁度陽が落ちかけた時だつたので、一面に黄色い段丘の連りが茜色を浴びてゆき／＼とゆれてゐるのは實に美しいものだつた。旅に出た初日からこれですつかり氣をよくしたは良かったが、シボレーの幌型に驚くなかれ十五人、運ちゃんを入れて十六人詰められたのには閉口した。何時か武尊の歸りにも十二三人詰められた轡があるが、兎に角十五人も全部一臺の中に納つたのは一寸あるまい。丁度此の日は町の女學校の何かゞあつた日で、此のバスが久住の方へ下る最終だつたので此んか珍らしい目に會へた次第だつた。

久住の町から久住山へ登るに、新道と舊道があり、縣の種畜場の所で分れてゐる。新道は久住山を目指して眞直ぐに原を横切つて行く。六角堂(展望臺)迄はだら／＼登り、此處から道は澤に入り登も急になるが程なく本山瀧。小便瀧だが、白い岩にのしかゝつてゐる二三本の紅葉が目さめる様な色だつたのは鮮かだつた。此處から登はいよ／＼急になるが一時間も登れば稻量と白口との鞍部をなす東千里ヶ濱に着く。コケモ、の群生が目につく。小舎の番人(菓子だとか繪葉書を別の小舎で賣るだけで、宿泊の

便宜はない)は、何百種とか高山植物があると自慢してゐた。頂上は丁度大雪山の様だ。久住山群は噴火口を圍んで小さい峯が並んでゐるもので、久住、九重、天狗、中岳、白口、稻量と言ふのは皆その一つの峯に付けた名前だ。硫黄岳の噴煙が時々霧に混つて硫黄臭い風が吹きつけてくる。東千里へ來た頃からひどい霧になつたので遠望は全然だめだつたが、霧の中に浮いた大船山や三俣山、九重山は霧のお蔭か非常に立派に見えた。白口澤を下つて法華院に下る。

法華院は坊ケツルの西南の端にあり、小さい流れに沿うた硫黄泉だ。九州の白骨と稱されてゐるそうだが、特に感心した所もなかつた。坊ケツルのツルと言ふのは朝鮮語の原と言ふ意味だと言ふ。案内書に書いてあるが、何うして朝鮮語が此んな山奥に限つて入つたのか、坊が何を意味するのかは知らない。十九日はとう／＼雨になつた。一日中じつとしてゐるのもつらいので、雨の晴れ間を見て大船山へ出掛る。大船山の東にある黒岳と言ふのは原始林に蔽はれ、紅葉が美しいと聞いたので出掛けたのだが、見た所特に驚く程の原始林でもなし、それに紅葉には全然早く、わざ／＼出掛けてびしよ濡れになる程の事はなかつた。僅に大船山の頂上にある噴火口(米窪と言ふ)とその噴火口の中の紅葉を見た丈。一頃の様子に體の丈夫な時なら、涼しくて良い氣持だなんて言ふ所だが、今の様な體になると風邪でも引かぬかと心配するんだから變れば變るものだ、我ながら感心して濡物の始末もそつちのけで風呂に飛込んだ。此の一日中U先輩のウイムパーの譯本を讀んだ。

廿日は素晴らしい天気、此の一日で元を取った。三俣山からの眺めは寒くはあつたが實に良かった。左から大船山、久住高原を経て祖母山（此の山へは登り度いと思つてゐる）久住山群、更に右へ轉ずれば茫々たる飯田高原、更によく見ると久住と九重との間に阿蘇の根子岳のギザ／＼が魅力的に現はれてゐる。根子岳と言ふのは九州切つての岩場だそう。製煉所——と言つても釜で硫黄の原鐵を焼くだけの装置なのだ。——で硫黄の出来るのを見せてもらつてから、秋の高原を満喫しながら——終ひには長すぎて嫌になつたが、十三曲りへ下る。箆うすの口温泉へ宿る豫定だったが、時間が早すぎたのでその儘十三曲りを下り、バスで中村驛へそして湯ノ平温泉へ出た。

### 中川孫一様

園山徳三郎

十一月二日結婚して芋川が山口と改まつた彼氏の新家庭を訪問するに就ては、あなたの御懇切な御注意も有つた事です。から出来るだけ日を延ばして居つたのですが、如何なる事情でか先方から早く来て呉れとの電話がありましたので、未だ早いとは思ひながらも密月の夢さめぬ或日の晩、憎まれ役の訪問をいたしました。新郎新婦に對する思ひやりから僕を牽制された貴君の御注意に背いた様で甚だ心苦しい氣持のまゝに、以下大略の見聞を御報告いたします。

畏友高瀬進三君の結婚されるや、當時針葉樹會報の編輯者たりし芋川君は僕に命ずるに新家庭偵察の大任を以つてしたのであります。生來多辯にして且つ鐵面皮なりと目されて居る僕を使唆し

て高瀬夫妻に多大なる迷惑をかけしめた張本人は現在の山口君であります。その彼が結婚するや因果はめぐつて彼自身が僕の來襲を俟つ事となつたのであります。然るに流石一滴の酒も嗜まぬ彼だけに冷靜な作戰計畫を樹てたのでありませう。遠慮してゐる僕に對して逆に「早く来て呉れ、準備は出来てゐる」といふ電話です。驚きました。單純な僕らの如き、これには全く裏をかゝれて啞然です。翌日の晩方、新家庭の玄關に立つた僕の姿は恐らく間の抜けたものであつたに違ひありません。たゞもうオド／＼として碌な挨拶も出来ません。膺揚に構えて居る主人公と、腹を見すかされ、テを見破られてゐる僕とでは、土臺役者が違ひます。その上に、月下氷人の説明で知つた通り、新婦は至近の縁者であられただけに彼とのコンビネーションは全然板についた、それこそ水も洩らさぬ間がらなのです。夫君の一鬚一笑は直ちにこれ暗號であり、會話なので、僕如きものゝ乗ずる隙は毛筋程もありません。いはゞ去日今日出來たての御夫婦とはちがひます。僕の腸を絞る様な苦しい質問などはバッテリー間の目くばせ一つで軽く一笑に附されてしまひます。まあ一例をお傳へいたしませうか。

スキーはおやりですか？

さあ……………

君、女のスキーなんかもうはやらないよ。

でも正月には高瀬君夫妻と行かれたら如何ですか？

さあ……………

君、いゝレコードを聞かせやうか。

今度の御旅行では何處が一番よかったですか？

さあ……………

自動車に乗りづめだつたから別に良い處は無いね。

園山さん、それよりあなたのお目出度は何時ですか？

こ、これぢや逆襲といふものです。假に中川さんが僕の役を引受けられたとしたら一體どうせう。然し矢張り駄目でせうね。

尤も中川さんならば新婚家庭を探訪するなんて事はなさりますまいが。

こんな状態で满身創痍、徒に時を刻む時計の音に追ひ立てられる感じですよ。斯くてはあらじと満身の勇を丹田に籠めて僕は質問しました。斷乎たる態度を以つて、夫君を質問の埒外に置く氣概を顔面に表はして、

學校はどちらでした？

すると奥さんは暗黙の内に山口君と連絡を果したるもの、如く、除ろに手をもみながら「第一です」と言はれる。

あそこにも同窓會は有るのでせうね。出席しましたか？

え、一回ばかり出ましたけれど、女學校のは永續きしませんわ。御結婚になるとどなたも見えませんが。

矢張山口君の奥さんも來年の同窓會は缺席です。まあそれはそれとして、意氣込んで始めた僕の會話も女學校の同窓會と同じ様に永續きはいたしませんでした。何故なら、其の時山口君が立ち上つて隣室からセピラの理髮師序曲をかけ始めたからです。僕は靜聽を餘儀なくされる、この巧妙自在な作戦は如何です。流石の中川さんもこれでは齒が立ちますまい。

斯くて僕は又しても完全に負けでした。然し僕も近くひとり者

から二人者になりますから、その時は此の日の體驗を生かしますせう。尤も高瀬君といひ山口君といひ、堂々たる一家の御主人が僕如き者の新家庭を探訪される様な舉には出でられまいでせうが。中川さん。然しあなたは僕の今度の訪問が單なる好奇心に依るものではない事をお汲取下さるでせうね。僕としては親愛する友人に迷惑はかけたくないのです。以前の高瀬君、今度の山口君の訪問記は、口こそ汚けれ、何れも針葉樹會流の溫心冷言に依る紹介のつもりなんです。ではこの手紙を結ぶに當つてお二人の御多幸を祈りたいと思ひます。

### 山岳部報告 (十一月)

#### 記 録

(1) 富士山 (一一・一一三) 小谷部、森川

吉田口五合を根據とし屏風岩尾根を完登す。

(2) 富士山 (一一・一四) 岩崎

スキー持參で出掛けたが全然駄目。七合五勺迄至る。

(3) 富士山 (一一・二二—二三) 望月、岩崎、大塚、日江井

吉田口六合目に天幕を張り、頂上往復及屏風岩尾根に遊ぶ。冬期用天幕の製作が間に合はなかつたのと雪が餘りなかつた爲雪中露營の練習は充分出来なかつた。

#### 日 誌

○秋山報告會 十一月九日(月) 於國立部室

出席部員 (本科六名、豫科四名、専門部一名)

## ○定期部員集會 於國立部室

十一月十六日(月)出席部員(本科十名、豫科七名)

冬季計畫につき具體的な發表あり。(之は既に先輩諸氏、關係諸山岳部、新聞社等に配布せり。)

廿四日(火)出席部員(本科八名、豫科七名)

三十日(月)出席部員(本科六名、豫科七名、專門部一名)

此の二回雪崩につき研究をなす。

## 通信

八甲田山から(一月四日)

八甲田遠征といふので野澤を止めにして張切つて出かけた處、根據地までの道中の長いので先づ閉口し、次いで雪が無いのでロクに滑れず、諸君に御すゝめするには一寸二の歩を踏む。但し東北振興に役立つことは非常なものだつた。矢張り書物にある通り三四月の頃に来る處だと思ふ。(孫)

新婚第一春を棒に振つて來ましたが、猿倉三泊の中やつと硫黄岳へ登つたきり。但し北、奥兩八甲田の間をウロついて山をよく眺めては來ましたが。三四月の頃一週間の豫定で來たらば相當面白く歩き廻れる處です。(山口稔一)

豫科一年の夏以來十年振りて奥入瀬を廻り、滞在二日半の中一日は此の地方特有の猛烈な風雪で籠城、第三日目は日本晴に恵まれ八甲田の概念を得ることが出來ました。トツサンの食欲旺盛なる事唯々あきれるばかり。確かに2は1の倍です。お蔭で歸りは大いに助かりました。(アン)

## 記録

○八甲田山(十二月三十一日—一月五日)中川 山口 鈴木

○野澤温泉(一月二日—一月五日)吉澤(熊) 堀岡 中島 鷹

野 林 柿原 岡田 覺張

○鳥海山(一月三日—一月七日)村尾

## 消息

園山徳三郎君 十二月十八日華燭の典を擧ぐ。夫人は朗子<sup>さき</sup>さん。

鷹野 雄一君 松本歩兵第五十聯隊に入營。

## 關西針葉樹會便り

松木謙三君が今度大阪支店へ轉勤したのを機會に、その歡迎會を兼ね關西針葉樹會の顔合を十一月十一日南の新三浦で開いた。私は丁度出張で在阪中だつたし、又折よく丸茂平造君が甲府から來てゐたので、非常に賑やかな會合になつた。席上、松木君が東京の會合で聲明した通り「俺が來た以上是非毎月定期的に會合を開こう、飲食ばかりでなく、たまには皆揃つて何處へか行つてもいゝじゃないか、例會の日取は今日に因んで毎月十日、もし日曜、祭日に當つたら月曜、さし當つて來年の紀元節には皆でスキーに行こう、會報へもドシ／＼原稿を出さうよ」といふやうな提案をして無論可決。

幹事はこうした會合の好きな中島孚君にきめた。私は始終東京大阪間を往來してゐるので、特に名譽會員にして貰つた。當日出席者左の通り

(主賓) 松木謙三 (會員) 中川 五十嵐 太田 丸茂 十合

岡田 中島 齋藤 高木英二君は社用のため出席出來ず、非常

に残念がつてゐた。

(中川孫一記)

定例集會 十一月二十日 於如水會館

出席者 (會員) 中川 吉澤 村尾 渡邊 近藤 金田 手塚

久保田 高瀬 園山 吉澤 鈴木 清水 増山 小柳

(部員) 林 小谷部 森川 望月 岩崎

中川氏から關西の針葉樹會に就て別項のやうな報告があり、小谷部君は冬山の計畫に就て説明した。吉澤一郎氏半歳の苦心に成る槍穂高附近の立體模型を展觀に供し、槍の穂先をつまんでみたり、電燈を消し懐中電燈を照して、朝陽夕陽の山膚を染める模様を現出したりして、頗る感じを出した。希望者多數ならば複製を造る由である。

忘年會 十二月八日 於 公樂

出席者 (會員) 中川 矢作 村尾 渡邊 近藤 手塚 久保

田 吉澤(松) 清水 増山 小柳 (部員) 柿原 林 小谷部

森川 望月 小林 岩崎

幹事の氣の利いた計らひで銀座裏にメートルを上げる。宴半ばにして近藤氏の「演説」渡邊氏の「羅生門」中川氏の「墓の油」等の餘興あり、夜更けてから歡を盡くして散會した。

公樂にて餘興を聞きて

孫さんはセメント捨て、も食ひつぶれ無し (スケ)

コンチヤンは腹がふくれて酔然と仰向け乍ら陶然たり

(讀人不知)

迷歌をば作ふと云へど吉澤の放送局は酔ひて酔はざり

(讀人不知)

(其他にも二三迷歌があるが判讀出來ないのは遺憾此上なし)

(以上増山記)

關西支部例會 一月十一日 於永樂莊(大阪梅田新道)

出席者 五十嵐 松木 十合 岡田 中島 齋藤

牛肉のオイル焼と稱する奴をつゝきなながら肝心の山の話よりは、よも山話に花を咲かせた。野澤の話が大體濟むと、大阪の酒と牛肉だけは何故美味なるか、大阪には何故美しい女が少ないか、の議論が始まり、大阪辯、料理屋の批判に至つて益酣となり最後に物價騰貴の話が附加へられて十時半散會。尙二月七日に伊吹山スキー行を決定。

(中島記)

編輯後記

カットは渡邊九郎氏の構想に成る立山東面の圖であります。どうも會報も遅れ勝ちで、方々から催促を戴きますが、遅れる原因は主に原稿不足に在るので、せいで御寄稿下さい。會員の一部には、何か鹿爪らしい事か、或は山の紀行でもなければ載せてはいけないものゝやうに思つて居られる方があるやうですが、決してそんな事はないと思ひます。お互ひによく知合つてゐる仲で書く記事の故に、特殊の興味と關心を生ずるのが會報の生命であつて、研究發表も差支はありませんが、その爲には別の機關もあります。そんな譯で、内容は決して山の事に限らず、生活の模様、身邊の出來事、感想内至會員の噂、其他何でも歓迎すべきでせう。特に地方會員諸君の消息を希望します。別に編者に對しては編輯上の御意見をお寄せ下されば幸甚です。